プロは専門的な知識以前に、「人の心が解る心」を！

先日、障害児の母親たちの懇談を拝聴する機会を得た。

そこで、養護学校を卒業すると社会に出ることから、子どもが社会性が乏しいことで、高等部の担任教師から、「お母さんの今までの育児が甘かった！」と云われたという母親の話があった。

この話を聞いていて、我が子の精神症状に向き合う母親からの次のようなメールを思い出した。

「病院へ行けば、『あなたの育て方が悪い！　本を読んで勉強しろ！』と云われ、本を読んでも同じ事が……すべて私が悪いんだ……すべて悪いんだ……　最近、私が精神的にちょっとおかしくなっちゃいました。」

いずれにしても、いわゆるプロたる立場の人が、こんな物言いを母親にするのはおかしいと思う。

今更、取り戻すことの出来ない過去の要因の責任を、これからも当人の最良のサポーターであって欲しい母親に問い詰めても、母親の辛さ、悲しさは増すばかりで、サポーターどころの話でないですよね。

プロが親に発言する言葉は、親を励ますこともあれば、傷つけることもある。そのことも理解しないで、プロは何気なく発言するべきではないと思う。

そして、親の過去のことをとやかく言うよりも、これからどうすべきかを一緒に考えてあげるのがプロというものでないだろうか。

その人の存在そのものを対象とする職業で、何故こんな基本的なことを理解していないプロがいるのか、不思議に思えてならない。

もし、「育ち直し」、「育て直し」の何らかの側面があると気づいているなら、具体的に示唆して勇気づけ、自分が出来ることで寄り添い、支援し続ける覚悟こそが、プロには必要でないだろうか。

「教養とは、人の心が解る心」ということからすれば、プロは専門的な知識以前に、まずは教養ある人であって欲しいと思う。

また、障害のある我が子を育てたある母親の長年の経験を振り返っての以前のメールの中に、「出会うプロによって、親子の QOL は決まる！」の言葉があったが、この言葉が切実な意味をもって蘇ってきた。

（2006 年 8 月 24 日　記）